
混沌している僕の世界

++

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

混沌している僕の世界

【Nコード】

N4877Z

【作者名】

十十

【あらすじ】

幽霊を見れる少年のもとに剣豪少女と勇者と魔王がやってきて力オスになる予定です。
舞台は現代です。

プロローグ

「あ、女の人の霊が憑いてる」

高校に入学してからちょうど二ヶ月が過ぎて、同時にちょうど三ヶ月目である六月一日に入った今日という日の帰り道。

隣を歩いている僕の友 あらがき 新垣の方をふと見てみたら、その新垣の肩に女性の霊が憑いていた。

女性の霊は、白のワンピースというベタな格好をした大人の女性で、なんだか恨めしそうな目をしている。一体どんな未練があつてこの世に残っているのだろうか。

「ちょ、マジか！ おいタカタカ！ お前どうにかしろ！」

「どうにもできないよ。僕は幽霊を認識できるだけだからね」

そう、僕は幽霊を認識することができる。けど、認識できるつてだけで、成仏させてあげたりはできない。ちなみに、タカタカというのは僕のあだ名だ。僕は たかみね・たかのみ 高峰高臣だから、略してタカタカ。

「ちっ、使えねえな。所詮はタカタカか。タカタカかって言いにくっ」

「だったら言うなよ。そもそも使えないのは新垣の方だろ。寺の息子のくせに幽霊が見えないってなんだよ。ぷぷぷ、エセ坊主」

僕がそう言うと、新垣は「あ、あのなあ……っ！」と小刻みに震えだした。どうやら、寺の息子のプライドを傷つけてしまったらしい。

「いいかタカタカっ！ 普通は見えねえんだよ！ 一〇〇人に霊が見えますかアンケート取ったら、九九人は見えねえって答えるはずなんだよ！ だからお前がおかしいんだよ！ よって俺は使えないわけじゃねえ！ むしろ正常なんだよ！」

ものすごい剣幕。新垣は頭がスキンヘッド（将来寺を継ぐ者としての心構えだとかなんとか）で、おまけに顔がちょっと怖いから、キレるともう不良とかヤンキーとかあちらの世界の方々とか、とに

かく物騒な奴にしか見えない。なので、見た目ほど怖い奴じゃないと分かっていても、ちよつと萎縮してしまう。

「わ、分かった、分かったから。ね？ 一度落ち着くんだ、新垣」
「……ほんとに分かったのか？」

睨むように僕を見てくる新垣。

それを見た僕はうんうんと頷きながら、

「ホントホント。確かに新垣の言うとおりだよ。幽霊なんてモノは、見えないのが正常さ」

「だろ？ だから見える必要なんてさらさらねえんだよ」

新垣はお怒りではなくなった様子。ふう、よかった。

「……けど新垣、お前は寺の息子だからさ、成仏くらいさせてあげられるだろ？ ほら、自分の肩に向かってお経を唱えてみなよ」

「いやいや、唱えてみなよとか簡単に言うな。お経って覚えるのムズいんだからな？ 大体よお、ほんとに幽霊なんか憑いてんのかよ

……」

言つて、新垣は自分の肩を怪訝そうに眺める。

そんな新垣に、僕は幽霊の最新情報を教えてやることにした。

「新垣。いまその幽霊はねえ、新垣のことを忌々しげに睨んでるところだよ。しかも、お互いの顔の距離、およそ三センチってところかな？」

「マジかッ！」

言葉を発したとともに、新垣は顔を大きく逸らす。

「別に逸らさなくてもよかつたんじゃないかな？ その幽霊、結構綺麗な人だよ」

「マジかッ！ ……けどよ、忌々しそうな目えしてんだろ？」

「まあそうだけどさ……」

けど、その女性の霊は紛れもなく美人の系統に入る顔立ちをしている。こんなにも若くて綺麗な人がなぜ、もう死んでしまっているのだろうか。……謎だね。

「ま、どうせ俺には見えねえんだし、どうでもいいや。それによ、

やっぱり女は生きてないとな！ そっぴりやもつすぐ夏だし、そしてら水着のお姉さんでも拝みに行こうな！」

白い歯をむき出しにして微笑む新垣。

僕はそれに呆れながら、

「新垣……お前さあ、坊さんになるって奴がそんな考えを持ってていいの……？ 煩惱まみれじゃん」

「おいタカタカ。それを言ったらよ、俺はどうやって生まれたんだ？ 坊さんである俺の親父が煩惱をかき集めた結果だろ？」

うん、異議なし。

「それもそうだね。じゃあ夏は砂浜で水着観賞をしよう」

ここら辺は海沿いだから、僕の家から徒歩一〇分もかからず海水浴場に行けるんだ。

「よし！ じゃあ約一ヶ月半後の予定が決まったところで！」

「ところで……何？」

新垣の言葉には続きがあるみたいなので、僕は促しをかける。

すると新垣は、自分の肩をビシッと指差しながら、

「どうやったらこの幽霊が放れてくれるかを考えるぞ！」

「ねえ新垣、その人差し指、幽霊のことをおもいつきり突き刺してるんだけど」

しかも、ちょうど目の部分だ。と言っても当然、女性の霊に害はない。なんせ、実体がないんだからね。だけど、女性の霊の機嫌をかなり損ねさせてしまったようだ。

「ちよ、マジかッ！」

「大マジ大マジ。その指のせいで、幽霊さんの睨み方が半端なモノじゃなくなってるよ」

女性の霊は、見得を切る歌舞伎役者よろしく目を見開いている。

「……新垣、お前たぶん、このままじゃ呪われると思うよ？」

「じよ、冗談じゃねえ！ 早くなんとかしろ！」

「だからさ、なんとかって言われても僕は霊媒師じゃないし」

「霊媒師じゃなくても見えてはいるんだろうが！ ちよっと話しか

けてみるよ！ 平和っていうのはお互いの対話から始まるんだからな！」

「うーん、じゃあまあ……ちょっとだけ、やってみるよ」
成仏させてあげたりはできないけど、話しかけたりならできる。

僕はこの女の人 じゃなくて幽霊のことを綺麗って言うておいたから、もしかすると女性の霊の中で僕の評価が高くなっているかもしれない。

だから、本当にもしかしたらだけど、『新垣から放れてくださいお願いします』って頼んでみれば、言うことを聞いてくれるかもしれない。

「あのー、ちょっとよろしいですか？」

そう声をかけると、女性の霊は僕の方を向く。その睨みは相変わらず力強くて、並々ならぬ怨嗟を感じる。

僕はそれに若干気圧されながらも、言葉の続きを発していく。

「あー、えーとですね……その、どんな恨みがあるのかは知りませんが、新垣には関係のないことでしょうか？ ですからですね、あのー、できることなら放れてく」

『じゃあ私の恨みを晴らしてくれるのっ！』

女性の霊が声を荒げた。目にはうつすら涙が浮かんでいて、閉ざした口元からはギチチツ……と齒軋りが聞こえてくる。

『ねえ！ どうなの……っ！』

「あ、え、いや……」

言葉を上手く返せないでいると、女性の霊は続ける。

『ねえ！ 学生のあなたには分からないでしょ！ 職場でいじめられて！ 心のよりどころだった彼氏にはフラれて！ もう人生最悪よ！ だから自殺してやったのよ！ 私を苦しめに苦しめた職場と彼氏に復讐するためにね！ けど、死んだところでどうにもならなかった！ この姿になってから職場と彼氏の家に化けて出てやったけど、それしかできなかつた！ だからあなたが恨みを晴らして！ アイツらを痛めつけてきなさいよ！ そうすればこの子から放れ

てあげる！ さあ私の未練を晴らして！ 私を成仏させてみて！』
そんな台詞を聞いた僕は、またかあ……と思う。

何がまたかあ……なのかと言えば、僕はまた、まったく役に立っていないんだなあと罪悪感を覚えてしまっただけのこと。

だって、せつかく幽霊の姿が見れるっていうのに、さらには声だつて聞けるっていうのに、おまけに会話までできるっていうのに……僕にできることは結局 それらのことだけなんだ。

僕はいままで、かなりの数の幽霊を見てきたし、それと同じ数だけ会話もしてきた。

幽霊の話を聞いている最中っていうのはもちろん、幽霊の顔を見ることになるわけだけど、その際の幽霊たちの顔は辛そうで、悔しそうで、苦しそうで、泣きそうで……生きていた時によほど嫌なことがあったんだろうなあって、しみじみと感じ取れるんだ。

でも、僕はどの幽霊に対しても、何もできなかった。

幽霊たちの恨みを晴らして、成仏させてあげることが、できなかった。

さっき、僕は幽霊を成仏させてあげることができない、って言うたけど、それは嘘だ。やろうと思えば、成仏させてあげることができる。だけどそうするためには、成仏させてあげたい幽霊の、恨みやら未練やらを晴らしてあげないといけない。

そして、それが難題。

いま女性の霊が言っていたみたいに、未練っていうのは、そのほとんどが復讐なんだ。だから、容易に手伝ったりはできないし、というより、復讐と称して他人を傷つけるような真似を、僕はできないしやりたくない。

だからこそ、僕は幽霊たちの願いを受け入れてあげられない。

その結果、僕は霊の話を聞くだけで終わってしまう。

……で、それが僕自身の罪悪感へと変わってしまう。

助けを求めている幽霊の話を聞いたにも拘らず、僕は何もしてあげられない。

そんなもどかしさが、僕の罪悪感の正体。

あーあ、こうやって罪悪感を覚えてしまっつてことはハナから分かってたんだから、話しかけなきゃよかった。

そんな風に思いながら、僕は女性の霊に言葉を返す。

「……あのですね、いま思えばこいつの実家、お寺ですから。ええとつまり、いつまでもこいつに取り憑いていると 無理やり滅せられるかもしれませんよ?」

この言葉は、僕のせめてもの情けだ。

この世にもつと長らく留まって、そしていつか、自分の手で復讐してみてください。

そういう意の表れだ。

しかし、女性の霊はそれをどういう意味として受け取ってしまったのだろうか、ぎよっとした表情を浮かべたのち、慌てたようにどこかへ飛んでいってしまった。まあ、僕が滅せられるかもしれないって言ったから、それに恐怖して逃げたんだらうけどね。

「新垣、もう大丈夫。幽霊はどっかに飛んでったよ」

「お、そうか! なんだよ、やりやあできんじゃねえか!」

「何を偉そうに言ってるんだよ……」 たく、ホントはさあ、新垣がこういうお祓いをできるようにならないとダメなんだぞ。そここのころ分かってるのか?」

僕がため息をつきながら告げると、新垣はニイと笑った。

「いつかできるようになるぜ!」

「ダメだこりゃ……」

一体全体何十年後の話になるのだろうか。

んー、新垣のことだから、隠居間近になっても全然できなかったりしてね。

「あ、そついえばよお……」

「ん、何?」

思い返すように言葉を紡いだ新垣は、そのまま言葉を続ける。

「……幽霊は、どっかに飛んでったんだろ?」

「そうだけど……それが？」

「それは成仏させたってことなのか？」

「いや、この町のどっかに飛んでった。言葉の意味そのままだよ」
ちなみに、速度はコンコルドぐらいだった。幽霊ってかなり速いんだよ。

「タカタカ！ お前はなんちゅうモンを世の中に放出してくれてんだっ！」

「大丈夫だつて。新垣には二度と取り憑かないだろうからさ」

「そういう問題じゃねえよ！ 俺みたいに幽霊に取り憑かれる人が出るかもしれないじゃねえか！ まったく、タカタカは何やってんだ！ ちゃんと成仏させてやれよ！」

「そうは言うけど難しいんだよ……」

僕だつて、幽霊を簡単に成仏させてあげられるのなら、見える霊を片っ端から成仏させてあげたいよ……。

そう思う僕の顔はどんなものだったのだろうか、新垣が改まったような感じで言葉を紡いでくる。

「あ、いや、悪かったな……。そんなこと、タカタカに言ってもしょうがねえわな」

「いや、別にいいんだよ。成仏させられなかったのは……事実なんだし」

そのあとは、お互いしばらく黙り込み、無言で夕焼けの空の下を歩き続けた。

再び言葉を交わしたのは、いつもの分かれ道でのことだった。

「じゃあ、俺はこっちだから　って別に言わなくても分かるか。じゃ、また明日な。タカタカ」

「うん。また明日」

告げ終われば、お互いそれぞれの方向へと歩き始める。

そうすれば、あとは帰るだけ。

特に、イベントはない。

こうして、平凡な一日がまた終わる。もっとも、幽霊と会話した

日を平凡と位置づけていいのかは多少判断に迷うけど。

でも、僕にとっては平凡かな。

結構慣れたもんだしね。

「さてと、今日は帰ったら何しようかなあ……」

夕日を背にそんなことを呟きながら、僕は帰路に着くのだった。

1章 1

「うん、面白かった」

帰宅後、僕はハードディスクに録画しておいた深夜アニメを数本まとめて見ていた。いまは最後に見たアニメのエンディング中。

というわけで見終わってしまった。

僕は「さて……」と立ち上がり、時計を見やる。

午後七時三〇分。

「……どれどれ、夕飯にしますか」

呟いたのち、キッチンへ向かう。僕は一人暮らしだから、炊事洗濯、その他もろもろを自分でやらないといけないんだ。

両親は……というより離婚をしているから片親で、僕は母さんに引き取られている。

その母さんと言えば、僕に楽な生活をさせるため、というありがたい理由から、遠く離れた地へ出稼ぎに出ているというか、まあ、派遣社員として頑張っている。

おかげでひもじくはない。仕送りも十分だし、家もアパートとかじゃなくて普通の一軒家だし。って、僕の住まい情報なんてどうでもいいか。

とにかく、僕は一人暮らしってことだ。

そんなわけでキッチンに入った僕は、まず冷蔵庫を開ける。

そして、愕然とした。

「な、何もない……」

いや、あるにはある。マーガリンにジャムにマヨネーズにめんつゆにケチャップにソースにエトセトラエトセトラ……うん、まあ、とりあえず調味料のたぐいしかなかった。

僕としたことが……冷蔵庫の中身の空っぽ具合を忘却の彼方へとすっ飛ばしていたよ。

「これはコンビニのお世話、だね……」

うなだれるようにしてリビングへ戻った僕は、財布を取ったのち玄関へ向かい、外へ。

外に出てみれば、涼しい夜風が僕のことを包み込んでくれる。それがあまりに気持ちよかったので、僕の気分は通常の状態まで回復。

うんうん、たまにはコンビニもいいじゃないか。

僕はテクテクと歩みを進めていく。

にしても、夜にどこかへ出かけるっていうのはなんかこう、よく分からないけど楽しいよね。妙な高揚感があるっていうか、そんな感じ。

とか考えていると、徒歩五分のところにあるコンビニに到着。

七時四〇分という微妙な時間帯だからだろうか、人はほとんどいなかった。

僕はとりあえず、雑誌コーナーへ向かう。そこで視線をあちこちにさまよわせる。けど、特に読みたい雑誌はなかった。ので、一八禁コーナーの雑誌をチラリと拝んだのち、僕はその場をあとにした。次に向かったのは、本命の弁当コーナー。

しかし、これも微妙な時間帯の影響か、種類が豊富なはずのコンビニ弁当は、一目で数えられる程度しか置かれていなかった。売れ残りですよ感が存分に漂っている。

けれどその中に、王道と呼んでも差し支えないあいっグ弁当さんが残っていたので、僕はそれを手に取る。ハンバ

さて、弁当を手に入れば、必ず子供の飲み物が欲しくなるのが人間だよ。僕は弁当の隣の棚から、パックの緑茶を取る。やっぱ日本人はお茶でしょ。

そうして欲しい物を手にした僕は、レジでお金を払い、それらを完全に自分の物にする。

レジ袋をぶら下げてコンビニを出れば、「ありがとございまして」と若いあんちゃんの声が耳に届く。

「どれ……腹も減ったし、さっさと帰るとしますか……」

来た道の方へと向き直り、僕は足を動かし始める。

都市部ではないこの町の空は大気汚染なんかとはまったくの無縁なので……と言ってしまおうと嘘になるんだろうけど、でも、小さく瞬いている無数の星たちを今日も確認することができる。ここは海沿いだから、空気が澄んでるんだろうね。

それを見ながら歩くというのは、中々に風流なものだ。……まあ僕には、あの星が　座だよ、とかいう知識はまったくないんだけ

ドンッ！

「痛っ……」

僕は電柱にぶつかった。

上を向きながら歩くというのは色々と危ないと悟った僕は、視線を正面に戻す。

「あ……」

正面を見た僕は、思わずそんな声を上げてしまう。ここから十メートルほど先にある電柱の下に、来た時にはなかったはずの人影があったからだ。

街灯に照らされている人影は、どうやら女の人のようだ。腰まで届いている長い黒髪を、巫女さんみたいに束ねているのが印象的。しかし、こちらに背を向ける形となっているので、全体像はまだ把握できない。

人なのか、はたまた幽霊なのか、僕は判断しかねる。

けど、その女の人からは力強さみたいなものを感じるから、どつてことない普通の人なのかもしれない。

それによく見てみれば、紺の袴に白の道着、腰に木刀というバイタリテイあふれる格好をしている。どこかの門下生なのかもしれないね。

「ま、気にしない気にしない」

言いながら、僕は止めていた足の動きを再開させる。

すると当然、電柱との距離は縮まっていく。

んー、気にしないとは言ってみたけど、やっぱり気になるよねえ。よしつ、『こんばんはー』とひと声かけてみよう。それで全てが明らかになる。幽霊かどうかは、顔を見ればすぐに分かるからことだからね。

見分け方は極めて単純。恨めしそうな顔をしていたら、その人は幽霊。まあ仮に、あの女の人が幽霊だったとしても、僕はまたなんの役にも立てないだろうけどね。

そんなことを考えていると、電柱までの距離が残り五メートルを切り、四、三、二、一、

「こんばんはー」

先刻の決意どおり、僕は電柱の下の女の人に声をかけた。

「む……？」

僕のあいさつを聞いた女の人は、怪訝そうな声を発しながら、振り返ろうとする。

たった一言『む……？』という声を聞いたただけだけど、その声は凜と澄んでいて、一陣の風のような力強さを感じた。

この人、やっぱり幽霊じゃないかもね。

そしてその思いは、こちらに向けられた顔を見て、確信へと変わる。

「おお……」

失礼だと分かっているけど、僕は声を発せずにはいられない。

その女の人、もと僕と同じ年ほどと思いき少女は、とても綺麗な顔立ちをしている。

切れ長の、しかしきちんと二重になっている、黒目がちの双眸。

鼻はスーッと通っていて、その下にある唇は蠱惑的。体はスレンダーでいらっしやて、背は高め。一七〇センチある僕よりも、少しだけ低い程度だ。

そんな彼女の全体的な雰囲気は……そう、大和撫子！ 幽霊と比べるなんておこがましい！ それほどまでに生氣に満ち満ちている！

「おお！ お主は私のことが見えるのかっ！」

そう！　とつてもよく見える見える　　つて……………えっ？　あの、いまなんか、おかしいなと言つてませんでしたか…………？

「ではお主！　私と戦えっ！」

少女がいきなり木刀に手を伸ばした　　と思つたら木刀じゃなかった。木刀だと思つていた部分は鞘だつたらしく、抜いたらおもいつきり真剣だつた。刃が電柱の明かりを鋭利に跳ね返している。

「　覚悟っ！」

真剣の握りをぎゅっと深くした少女は、その両腕を自分の頭上へと振り上げた。振り上げられた刀身に、ギランと光が流れる。

その一連の所作を見た僕は、半ば死を覚悟しながら両手をわたわたさせる。

「ちよ、ちよ、ちよちよちよと待つて！　死ぬ！　僕死んじやうつて！　まだ一五年しか生きてないのにつ！　てかアンタ銃刀法違反だぞ！　決闘とかそういうのは、真剣を取り扱つてる道場の門下生とでもやつてくださいよお！」

「ぬ？　そうか……………お主は弱き者か。では、致し方ないな……………」

少女はそう言つと、上段に構えていた真剣を腰元まで降ろす。それから、チンツと音を立てさせつつ、刀身を鞘の中に収めていく。

ふう……………なんとか生命の危機を乗り越えられたみたいだ。

胸を撫で下ろしつつ、思わず安堵の息を漏らす僕。

そんな僕をよそに、辻斬り少女は僕の背中へと回つてきて、

「ではお主の家に行こうではないか。ほれ、きびきび歩け」

と、僕の背中を勝手に押し始める。

……………なぜに？

「あの……………質問してもいいかな？」

恐る恐る尋ねると、少女は「ははっ」と涼やかに笑つたのち、

「構わぬぞ。いまは気分がいいからな」

じゃあ気分が悪いとダメなんだろうか？　とか考えながら僕は質問を始める。

「えーと、じゃあまず……………君は何者？　幽霊？　それとも人？」

「私は霊だ」

ふーん、幽霊なのか。こんなにもバイタリティみなぎる幽霊を見たの初めてだよ。一体どんな未練を持っているのだろうか。戦えっ！とか言ってたよね。

すぐく気になるけど、まあ、それはあとで聞くとして、

「じゃあ次ね、なんで君は僕にさわられるの？」

いままでたくさんの幽霊を見てきたけど、ここまでべったり

つまり、まるで人間にさわられているかのような感覚を覚えたのは初めてなんだ。これまででは、どんなにさわられたとしても、せいぜい、風に撫でられたような感じとか、そのぐらいに微弱なものばかりだった。

「むう……それはまこと残念ながら、私自身にも分からぬのだ。気づけば、このようなことができるようになっていたのだ。もっとも私のことを見ることのできる者にだけ、さわられるようなのだがな。しかし……ふむ、これまではあまり気にしていなかったが、確かになぜ、霊である私が人にさわられるのだろうか？ 長年この姿にいるからだろうか……」

小首を傾げながら言葉を紡いだ幽霊少女に対し、僕は疑問を覚える。

「長年って……もうどのぐらい幽霊やってるの？」

「し、失礼な！ おなごにそんなことを聞くな！」

なんか怒鳴られた。なんだよなんだよ、死んでからの年数なんだから、別に聞いてみたっていいじゃないか。それとも、聞かれるのが恥ずかしいほどに、長いこと幽霊をやっているのかな？ もしかしたら、何百年、とか……？

んー、だとすれば、確かに言いたくはないよね。

「あの、ごめんなさい。思い返してみれば、僕は確かに失礼だったよ。ええと……」

「ああ、そういえば自己紹介がまだだったな。私の名前は雅^{みやび}だ。それと、別にもう謝る必要はない。すでに気にはしておらぬからな」

僕の背中を押している幽霊少女は、雅という名前らしい。なるほど、雰囲気にはぴったりな名前だ。さぞかしネーミングセンスのいい親だったのだろう。

「で、お主はなんと申すのだ？」

あつ、そうだ。僕も自己紹介しないとね。

「えっと、僕は高峰高臣。みんなは略してタカタカって呼んでるよ」

「た、タカタカ？」

「そう、タカタカ」

「では高臣よ」

「えっ！そこはタカタカじゃないの！」

「なんとなく気持ち悪いのでな、普通に呼ばせてもらうぞ」

「まあ、別にいいけど……」

僕はなぜ落ち込んでいるのだろうか。分からない。けどもしかしたら、子供の頃からそのあだ名で呼ばれてきたせいで、もう、その呼び方をされないと満足できなくなっているのかもしれない。どうでもいいけど。

「それより雅ちゃんさあ」

「ちゃ、ちゃん付けするなあ！なれなれしいっ！」

ちよつとしたおふざけのつもりで言っただけに、近所迷惑極まりない声で抗議された。まあもつとも、幽霊の声は僕にしか聞こえないわけだから、どんなに大声を出されても問題ないんだけどね。ただ、僕の鼓膜には重大なダメージ。

「……ごめんごめん。じゃあ、えーと……雅はさあ」

「よ、呼び捨てにするなあ！なれなれしいっ！」

こ、鼓膜があ……。

「……じゃ、じゃあ僕は君のことを、なんて呼べばいいのさ……」

「さん付けやらなんやら、他にも色々あるだろう！」

「じゃあねえ……雅君さん、とかは？」

「サン ラザ中野君が司会者に呼ばれた時みたいになってるではないか！」

「あれ？ そういうの知ってるの？」

僕の予想では江戸時代の人だと思っていたのに。

「当たり前だ！ 私は生まれこそ結構な昔ではあるが、時代の波にはきちんに乗っかっておるぞ！ 暇な時は一日中、ヤダ電機で家電を見ているのだからな。3Dが出た時は興奮したぞ」

……へえ、なんか台無し。

「どうした高臣？ 急に肩を落としたりして」

「なあに、雅さんの古風なイメージが総崩れしただけさ。……やつてるのが完全に、休日のおっさんじゃないか」

「な、何を申すか！ きちんとシヨップなどにも行っておるのだぞ！ 買えないし着れないのだからなっ！」

「なんで胸張ったの！ 威張れる要素なんてどこにもなかったよ！」
僕のそんな突っ込みに、雅さんは胸を張ったまま答える。

「確かに、買えないことと着れないこと、この二つは威張るようなことではない。しかし、私は見ることでできる。そして、私はそんな私を誇りに思う」

「だからなんだっていうんだ！ わけが分からないよ！ っつこんな話をしてる場合でもないんだよ！ 雅さんはなんで僕の背中を押してるのっ？ なんで僕に憑いてきてるのっ？」

「ん？ それはだな」

「君、ちよつといいかな？」

雅さんの声が、唐突に聞こえてきた男の人の声によってかき消される。

僕は声の聞こえた方 背後へと向き直る。

すると、僕の眼前には雅さんがいた。ああ、なんて綺麗な人なんだろう。こうして一目見ただけでも惚れ惚れしてしまう っつそっじゃない。

謎の主は、その雅さんの後ろにいた。

警察官だった。

「君だね、一人でワーワー騒いでる若者っていうのは。 ったく……」

近隣住民から苦情がきているよ」

「やれやれとでも言いたげな顔をしている警察官の言葉を受けて、僕は狼狽する。」

「えっ？　ぼ、僕ですか？　僕一人ですか？　雅さんはっ？」

「そうやってとぼけてもダメだよ。どこをどう見ても君一人きりでしようが。それともあれかな？　もつと仲間がいたのかな？」

「あっ、そっか。雅さんがこれまでの幽霊とあまりにも違いすぎていたから、瞬間的にももの見事に忘却していたけど、雅さんはこれでも一応、幽霊なんだよね。」

「ということは結果的に、僕って周りから見れば、一人で喋ってるヤバイ人じゃん。」

「そしてヤバイ人の行く末は言わずもがな、ブタ箱である。」

「す、すいませんでしたあっ！」

「僕は勢いよく頭を下げる。……ん？　何か柔らかいものにぶつかってる？」

「まあ、分かればいいよ。今日のところは補導しないであげるから、とにかくさっさと帰りなさい」

「警察官様からありがたいお言葉を頂戴した僕は、さらに深々と頭を下げる。」

「分かりましたありがとうございますご迷惑おかけしてホントすいませんでしたっ！」

「君、謝る声も大きいね……。ほら、今日はもういいから。早く帰りなさい」

「あ、はい」

「そう返事をしながら頭を上げた僕は　鬼を見た。」

「た、高臣……貴様、む、胸に……胸に頭をつ、ぶ、ぶつけおったな……っ！」

「顔を真っ赤にしている雅さんは、震えた声を発しつつ、真剣を抜き始めている。ってことは、さっき頭に感じたあの柔らかな感触……アレは、雅さんの胸でしたか。ほほう、見た目よりも随分とこ」

立派で……って、そんなことを考えている場合じゃないよ……っ！

「君？ どうしたの？ なんか顔色悪いけど？」

「け、警察官さん……」

「何かな？」

「あ、あのですね、たったいまからこの場で、とてつもなく怪奇で、とんでもなく猟奇な、そんな殺人事件が起こるかもしれません……っ！」

シュイン ツ！ という小気味のいい音を奏でたと同時、白銀の刃は完全に抜き放たれた。そして、その切っ先が僕に向けられる。

「高臣！ いざ覚悟っ！」

「いやあああああああああーっ！」

このあと、僕は約三〇分間の逃走劇を繰り広げたのち、頭部への峰打ちで許してもらった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4877z/>

混沌している僕の世界

2011年12月17日01時05分発行